

北海道浦河高校
うらかわ

探究学習

「総合的な学習の時間」を 教科学習と関連づけ、 課題研究を学びの総括点に

変革のステップ

背景と課題

- 「総合的な学習の時間」が、進路学習中心で、探究学習の要素が少ないプログラムとなっていた
- 生徒の多くが、指示されたことはできるが、自ら考え行動できるという状態にまでは至っていなかった
- 地元就職者も多く、地域を支える人材育成が必要

実践内容

- 課題研究の導入** 学校教育目標と育成を目指す資質・能力を改めて整理。その達成に向け、「産業社会と人間」と「総合的な学習の時間」を再編し、教科学習と関連づけた課題研究を推進
- 課題研究の推進体制を整備** キャリアガイダンス部を設置し、課題研究を進める体制を整えた
- ICT教育の推進** 文部科学省の研究指定を受け、ICTを効果的に活用した授業を推進

成果と展望

- 課題研究やボランティア活動などを通して、積極的に学校外で活動する生徒が増えた
- 進路目的が明確になったことで、生徒の中には道外の国公立大学や医学部を志望するようになった

北海道浦河高校は、道央の日高地方にある浦河町の中心部に位置する町内唯一の高校だ。2012年度、隣町の商業科を有した様似高校と統合・再編し、総合学科を擁する高校となった。そうした同校が、国立教育政策研究所（以下、国教研）の指定を受けて「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）の改革に着手したのは、16年度のこと。それまでの総合学習は、職業・学問調べや社会人講話などの進路学習が中心であり、探究学習の要素が少ないことが課題だった。生徒の気質にも課題が見られた。改革を中心となって進めてきたキャリアガイダンス部長の

一歩前に踏み出す勇気を
生徒たちに与えたい

PROFILE



町立浦河実践女学校として開校。校訓は「自主・敬愛・努力」。1948年度、男女共学・現校名となり、2012年度、総合学科に再編。人文科学・自然科学・情報ビジネス・健康生活・地域文化の5系列を有する。

| | |
|-----|-----------------|
| 設立 | 1932（昭和7）年 |
| 形態 | 全日制・単位制／総合学科／共学 |
| 生徒数 | 1学年約160人 |

2018年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、小樽商科大、北海道教育大、弘前大、群馬大、信州大、金沢大、釧路公立大、札幌市立大に16人が合格。私立大は、札幌大、千歳リハビリテーション大、天使大、日本赤十字北海道看護大、北海学園大、大東文化大、文教大などに延べ21人が合格。

| | |
|----------|---|
| 住所 | 〒057-0006 北海道浦河郡浦河町東町かしわ1-5-1 |
| 電話 | 0146-22-3041 |
| Web site | http://www.urakawa.hokkaido-c.ed.jp/ |

佐藤友洋先生は次のように語る。

「生徒は素直で、教師が指示したことにきちんと取り組みます。一方で、自ら考え、行動するという点には課題がありました。地域には大学や専門学校がないため、生徒は将来像を描きにくい面があり、卒業後すぐ就職して、地域を支えていく生徒もいます。そうした生徒たちに、目標や課題意識を持つて取り組む姿勢を育み、社会で役立つ資質・能力を身につけさせたいと考えました」

そこで、総合学習を「学びの総括点」と位置づけ、コミュニケーションスキルと思考ツールを習得させるための指導を始めた。そうした折



北海道浦河高校校長

吉瀬 献策 きちせ けんさく
教職歴30年。同校に赴任して1年目。「校長職は、生徒と先生の人生を預かる職と心得て力を尽くす」

羽石 康司 はねいし やすし
教職歴28年。同校に赴任して2年目。「人を活かす、人に活かされ、人と絆を心にとめ、アイデンティティを確立できる人を育て」

佐藤 友洋 さとう ともひろ
教職歴18年。同校に赴任して5年目。キャリアガイダンス部長。「時代の変化に対応し、柔軟、かつしっかりとした基礎を持つ」

木村 準 きむら じゅんいち
教職歴13年。同校に赴任して8年目。進路指導部長。「地域に愛され、地域に貢献できる人材の芽を育てる」

北海道浦河高校

に受けたのが研究指定だった。同校は「ワン・モア・ステップ(もう一歩前に)」をキャッチフレーズに、主体的に行動できる生徒の育成に向け、動き出した。

事業に対する厳しい指摘が 新たな課題研究への端緒を開く

まず着手したのが、総合学習の年間計画の立案だ。1年次は、問いの立て方や思考ツールを習得させた上でライフプランを作成させ、2・3年次では課題研究に取り組みさせて、その結果を全体に発表させる会を行うことにした。

しかし、課題研究の発表会を視察した国教研の担当者から、課題研究が調べ学習にとどまっていると指摘された。「『産業社会と人間』との連携など、総合学科のよさを生かした進め方に、学校が一丸となって動くためには、学校教

図1 学校教育目標と必要な資質・能力

- ◎【自主】物事をよく見て理解し、自ら考え正しく判断するとともに、主体的・協動的に探究し行動することができる生徒。
[必要な資質・能力] ①関心・意欲・態度 ②知識・技能 ③思考力、判断力、表現力
- ◎【敬愛】自他の人権や生命を敬い尊重する精神を持ち、多様性を認め合いよりよい人間関係を形成することができる生徒。
[必要な資質・能力] ④想像力 ⑤協働性(対話力) ⑥社会性
- ◎【努力】望ましい自己表現のために不断に資質・能力の向上に努め、豊かな地域づくりに参画しようとする意欲を持つ生徒。
[必要な資質・能力] ⑦達成感、満足感 ⑧自己肯定感、自己有用感 ⑨実行力、継続力、体力

*学校資料を基に編集部で作成。

育目標を見直すべき」とアドバイスされた。

同校はすぐに動いた。当時の校長・教頭らを中心に議論し、校訓の「自主・敬愛・努力」に基づき、3つの学校教育目標を立てた。そして、各目標に必要な資質・能力を整理した(図1)。

次に、1年次の「産業社会と人間」を総合学習の土台と位置づけた上で年間計画を見直し、「単元配列表」を学年ごとに作成した(図2)。それは、各教科・科目と単元が、1年次の「産業社会と人間」、2・3年次の総合学習のどの活動と結びつくのかを示した表で、カリキュラム・マネジメントの視点に基づく教科横断的な教育課程を構築した。佐藤先生はこう説明する。

「あらゆる教科学習の終着点に課題研究があることを可視化しようと、教務部を通じて各教科担当に作成を依頼しました。教科学習と課題研究を関連づけることで、生徒は授業

図2 1年次 単元配列表【主体的・対話的で深い学び】

| № | 教科名 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 |
|---|---------|------------|---------------------|-------------|-------------|-------|-----|
| 1 | 国語総合 | | | 意見を書く | 本文をもとに意見を書く | | |
| 2 | 現代社会 | 社会形成のための探究 | 過早制度 | | | 障害者体験 | |
| 3 | 数学 I A | | | 集合と命題(論理思考) | | 2次関数 | |
| 4 | 化学基礎 | | 蒸留、ろ過体などの実験 | | | | |
| 5 | 体育 | | 体力測定データのExcel集計(情報) | | | | |
| 6 | 保健 | | | | | | 健康 |
| 7 | 産業社会と人間 | 自己理解(自治研修) | ジョブリサーチ(職業観、探究初学) | 論理的思考講座 | 思考ツール(論理思考) | | |
| 8 | 音楽 I | | | 合唱 | | | リコー |

1年次の「産業社会と人間」と各教科・科目の関係を示した単元配列表。2・3年次では「総合的な学習の時間」と各教科の配列表になる。*学校資料をそのまま掲載。全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(https://berd.benesse.jp/)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

の目的への理解が深まり、教師も他教科との関連をより意識した授業づくりができます」

17年4月には、主として履修指導などを担当していたガイダンス部を、総合学習の企画・運営も行う「キャリアガイダンス部」（以下、CG部）に改組し、すべての分掌の上位に置いた。

CG部が取り組みを主導し 教師間の意思統一を図る

そうして生まれ変わった課題研究は、生徒の生き方や視野を広げるという願いを込めて、「エキスパンディング・タイム」と名づけられた。1年次に探究の基礎を学び、2年次で世界、3年次で地域の課題に基づいた課題研究を行う。

「本校の使命は、地域を担う人材を育てることです。世界的な課題を知った上で、地域にどのような課題があり、具体的に何をすべきかを考える順番の方が、広い視野から地域について深く考えられ、進路にも直結しやすいのではないかと推測しました」（佐藤先生）

1年次では、「産業社会と人間」でKJ法やマインドマップの使い方、問いの立て方、調査・発表の方法など、課題研究の基礎を身につける。そして、2学期半ばから、各教科が示したテーマ、例えば数学であれば「黄金比」「三平方の定理」などの中から関心のあるものを選択。選んだ教科の担当教師の指導を受けながら個人で研究を進め、ポスターにまとめて発表する。

クラス発表では生徒と担任がルーブリック

（後述）で評価し、上位2人を選出。学年発表でさらに2〜3人に絞り、12月に行う3学年合同の学習成果発表会で発表する。17年度は、折り紙の仕組みをものづくりなどに応用する最新技術について研究した生徒らが、発表者に選ばれた。課題研究の進め方の留意点について、佐藤先生は次のように語る。

「課題研究について、生徒に共通で伝えたいことは、学年合同で授業を行い、CG部が説明します。また、グループ活動で教科担当が個別に指導する部分については、3日前までにCG部が指導案を作成し、共有します。CG部が一元的に統括することで、探究学習の指導に不慣れな先生も進めやすく、共通認識や意思統一を図りました」（佐藤先生）

ルーブリックを基に評価し、 自身の成長を可視化させる

2年次では、世界を起点に、課題の中から研究テーマを決め、①問いを立てる、②調査する、③分析資料を作る、④発表するの4ステップで課題研究に取り組む。

生徒は、「人間の文化」「自然現象」「生活や福祉」「ITとビジネス」「地域課題」の中から1つを選択。自分が研究したいテーマを考え、テーマが似ている生徒同士で5〜6人のグループを組む。そして、「グリーンツーリズムの可能性」「医療格差について」など、改めて研究テーマと仮説を設定し、研究計画書を作成。CG部

がその仮説の妥当性を審査する。内容次第では、仮説を設定し直させることもある。

3年次は、2年次と同じ5つのカテゴリーから1つを選び、「北海道人の育成」という観点を踏まえて研究テーマを決め、グループ研究を行う。17年度の研究テーマは、「アポイ岳ジオパーク〜ヒダカソウを救え」「町民が望む理想のホスピタル」「避難所生活の課題と対策」などだった。発表と評価方法は1年次と同じだ。

なお、18年度は研究テーマをSDGs（*1）の17の目標の中から考えさせた。

課題研究の評価は、1〜3年次とも専用のルーブリックで行う。ステップごとにルーブリックを基に自己評価と他者評価を行い（図3）、9つの資質・能力について、身についたと思う分だけ、「自己成長グラフ」の棒グラフのマス目を色で塗る。すべてのステップが終わった時にどれだけマス目が塗られているかで、自身の成長を実感させることができる。

「生徒も教師も、その力が身についた根拠を語れなければなりません。ルーブリックがあることで、生徒にどのように声をかければよいか分かり、自信を持って指導できるようになったと言う教師もいました。生徒も取り組みの意義を理解し、意欲的に活動できるようになったと思います」（佐藤先生）

17年度の3学期には、CG部と教務部の協働で、あらゆるルーブリックの土台となる「コアルーブリック」を作成した。今後は、それを基

*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17の目標と169のターゲットがある。

図3 「平成29年度 3年次 課題研究(E T) ステップ2 活動評価」

| 平成29年度 3年次 課題研究(E T) ステップ2 活動評価 | | | | ET評価項目 | | |
|--------------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--|-----------------|
| ステップ2 研究課題 | 4 | 3 | 2 | 1 | ET評価項目 | 自己評価 4-3-2-1 |
| 取り組む課題に対する解答の予測が確実に行われている。 | 取り組む課題に対する解答の予測は概ね示されている。 | 取り組む課題に対する解答の予測は概ね示されているが不十分である。 | 取り組む課題に対する解答の予測は示されていない。 | 取り組む課題に対する解答の予測は示されていない。 | ①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ③態度 | 4-3-2-1 |
| なぜ、その課題に取り組むのかという着眼点や、前提条件を十分に示している。 | 課題に取り組む着眼点や、前提条件が示されている。 | 課題に取り組む着眼点や、前提条件が示されていない。 | 課題に取り組む着眼点や、前提条件が示されていない。 | 課題に取り組む着眼点や、前提条件が示されていない。 | ①主体性・関心・意欲・態度 ②知識・技能 ③思考力・判断力・表現力 ④態度 | 4-3-2-1 |
| 課題解決に向けた手順などが明確に示されている。 | 課題解決に向けた手順や方法などが概ね明確に示されている。 | 課題解決に向けた手順や方法などが示されていない。 | 課題解決に向けた手順や方法などが示されていない。 | 課題解決に向けた手順や方法などが示されていない。 | ①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ③態度 | 4-3-2-1 |
| 仮設で予想したことが検証できる、論理的な方法を明確に考えている。 | 仮設で予想したことが検証できる、論理的な方法を考えている。 | 仮設で予想したことが検証できない、論理的な方法を考えている。 | 仮設で予想したことが検証できない、論理的な方法を考えている。 | 仮設で予想したことが検証できない、論理的な方法を考えている。 | ①主体性・関心・意欲・態度 ②知識・技能 ③思考力・判断力・表現力 ④態度 | 4-3-2-1 |

| 活動日 | 評価の項目(具体的な活動などを記入する) |
|--------------|----------------------|
| 5月22日(月)5~6限 | |
| 6月8日(木)5~6限 | |
| 6月15日(木)5~6限 | |
| 6月22日(木)5~6限 | |

ET評価項目
①主体性・関心・意欲・態度
②知識・技能
③思考力・判断力・表現力
④態度
⑤協働性・社会性
⑥実行力・継続力・体力

「ET評価項目」には、同校が育てたい「9つの力」のうち重視する資質・能力を明記し、学校教育目標との連動を図っている。*学校資料をそのまま掲載

e。ポータルフォリオに記録も 活発なボランティア活動も

に全教科、学校行事、部活動のルーブリックを作成して、評価に活用する予定だ。

同校では、総合学習の改革と並行して、15年度から3年間、文部科学省の「次世代の教育情報化推進事業(情報教育の推進等に関する調査研究)」にも取り組んできた。1クラス分配備されたタブレット端末は各教科で活用。また、北海道教育委員会が作成したルーブリックを、

自校の学校教育目標に対応するよう改編し、情報教育に関するシラバスを作成した。それを基に、各教科・科目の各単元で育む資質・能力を盛り込んだ年間計画を立て、指導案にも明記した。例えば、政治・経済の授業では、「幸せな国とはどのような国か」をテーマに、データを基にグループで議論させた。イメージだけで捉えないように、生徒は、日本とコスタリカ、任意の2か国について、識字率や貧困率などを調べ、それらの結果をタブレットでグラフ化し、総合学習で学んだKJ法などを使いながら議論した。

18年度には「Classi」(※2)を導入。同校ではボランティア活動を広義の教育課程として参加を勧めており、生徒は地域の清掃活動や町民芸術祭の支援などの活動記録を「Classi」に入力し、ポータルフォリオとして活用する。取り組みを主導した進路指導部長の木村準一先生は語る。

「ボランティア活動を通して、校内の活動だけでは得られなかった充実感や地元愛を持つ生徒も多く、自分の体験を言葉で残したいという思いが、『Classi』の積極的な活用につながっているのでしょう。さらに、大学入試が多面的・総合的評価によるものになっていく中で、活動の振り返りを記録しておくという意識もあると思います」(木村先生)

教育の不易を大切にしながら、 取り組みの定着を図る

一連の改革の結果、生徒は大きな成長を見せ

ている。生徒の事前・事後のアンケート結果を見ると、課題であった主体性やメタ認知能力など、ほとんどの項目で自己評価が上昇。ボランティア活動の参加率も上昇し、進路選択にも幅が出てきた。羽石康司教頭はこう指摘する。

「課題研究を通して、『A大学を訪問して、B先生の話を聞きたい』と、自分で連絡を取って話を聞きに行くなど、積極的に学校外に出る生徒が増えました。そのように、大学進学目的が明確になったからでしょう、17年度には、最後まで諦めずに頑張り、国立大学医学部に合格した生徒が出ました。医学部を目指している卒業生もいます。道外の大学を志望校に掲げる生徒も増えており、『もう一歩前に』出る勇気が芽生えているのを感じています」

今後の課題は、現在の取り組みをシステムとして定着させることだと、吉瀬献策校長は語る。「次期学習指導要領への対応もさることながら、人格の形成や生きる力といった教育の不易の部分を実現するために、課題研究やICTを活用しているのが、本校の特徴です。取り組みの枠組みが整った今、理念やノウハウを全校で共有することが、今後の発展の鍵になると考えています。学校のシステムとして定着させ、取り組みを主導してきた教師が異動しても、その質を保てるようにする必要があります。教師自身の資質・能力を高め、さらなる指導力の向上に努めていきます」

* 2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。